# HILLTOP NEWS

坂の上野 田村太志クリニック

発　行
坂の上野 田村太志クリニック
北上市上野町4丁目2-15

第35号


院長あいさつ

## 日野原重明賞特別賞、受賞にあたり

本誌は大体いつも院長挨拶の原稿ができあがるのが一番遅いのですが、それが功を奏して(??)発行間際にビッグニュースが飛び込んできました。2月23日(日)東京で開催された医療秘書学会で当院医療秘書高橋留美の発表が「日野原重明賞特別賞」を受賞致しました。演題名は「震災直後の停電下での電子カルテを用いた診療経験　～当院における災害対策～」です。3月1日発行の岩手日報、岩手日日新聞にも掲載され、本誌でも関連記事を掲載致しました。

当院は現在常勤スタッフ16名、非常勤4名の合計20名のスタッフがいます。7名の看護師、4名の管理栄養士(1名は職員指導を担当する顧問)、事務9名で、入院を持たない医師一人の内科系のクリニックにおいては最多の部類かと思います。普段の診療だけをやるのであればこれほどまでのスタッフ数は必要ないかもしれませんが、僕は学会活動も重視しています。学会は最新の知識を学んだり、他の医療機関等の発表を聴いて良いところを学んだりすることができます。発表者の立場からすると自分たちのしていることがもしかすると他の医療機関からの参加者に影響を与え、さらに多くの患者さんに影響を与えることが出来るかもしれません。

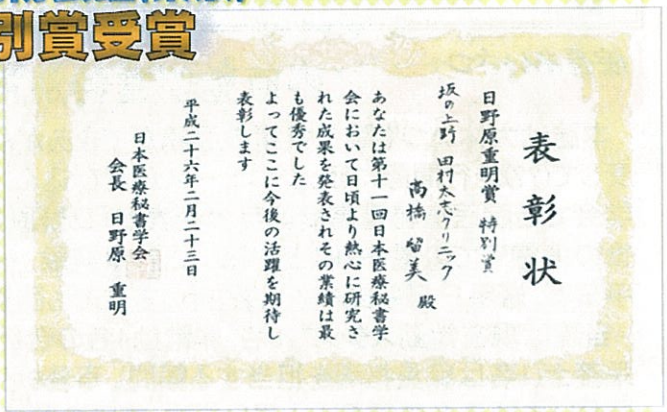
今年11月で当院は開院から10周年を迎えます。これまで登録されたカルテ総数は21000名を超え、毎月の来院患者数も約2000名と、それなりに多くの患者さんの診療に関わっています。でも、インパクトのある発表ができれば、学会参加者が持ち帰り自院の患者さんに還元することで何万人ないしは何十万人よりも多い方々に影響を与えることもあり得るのです。そのような観点から今後も学会発表も重視していきたいと考えています。

この数日の間に日本糖尿病学会で2題とプライマリ・ケア連合学会で1題の発表が採択されたというメールが入ってきました。3月～6月は1年の中でも特に学会での休診が多い時期で患者さんには大変なご不便をおかけします。上記の事情をなにとぞご理解下さいますようお願い申し上げます。

# 日本医療秘書学会第11回学術大会

## 2月23日日本消防会館(東京)

## 高橋留美　日野原重明賞特別賞受賞


表彰状

日野原重明賞　特別賞

坂の上時　田村大志クリニック

高橋　留美　殿

あなたは第十一回日本医療秘書学会において日頃より熱心に研究された成果を発表されその業績は最も優秀でしたよってここに今後の活躍を期待し表彰します

平成二十六年二月二十三日

日本医療秘書学会
会長　日野原　重明

日本医療秘書学会の理事長であり、さまざまなメディアでも有名な日野原重明先生(102)が医療秘書の身分を確立するため、業務の質を高めるために発足した学会です。毎年学術大会を開催しております。今回、私は東日本大震災での停電時でも診療継続できた当院の対策について発表してきました。その内容をご紹介します。

### 震災直後停電下での電子カルテを用いた診療経験 （抜粋）

**【目的】**災害発生時に基幹病院に軽症患者が集中しないようにするため、停電下でも診療継続できる対策を診療所においても構築すること

**【方法】**ノートPCでの使用可能な電子カルテDynamics（ダイナミクス）を導入。サーバ等主要なPCには無停電装置(UPS)を装着。メインのノートPCには大容量バッテリーを装着。オプションバッテリーを装着したプリンターを2台導入した。毎日のデータバックアップは通常のハードディスクの他、電源不要のUSB接続のポケットハードディスクにも実行することにした。

**【結果】**乗用車のシガーソケットからの充電は可能であったが、貴重なガソリンが減るという問題があり、長時間の停電には発電機の準備やガソリンの備蓄が必要である。このことをふまえ震災後さらに簡易型のガス発電機（ホンダエネポ）2台とソーラー充電器等を購入した。

**【考察と結語】**停電時でもノートPC等を用いることで電子カルテを使用しての診療が可能であった。また、UPSが作動しているわずかな時間にリアルタイムの電子カルテデータのバックアップを取ることが必要である。長期間の停電には発電機の準備とガソリンの備蓄が必要である。 災害時に基幹病院に軽症患者が集中することを避けるため、また自院をかかりつけ医とする患者を「医療難民」としないためにも各診療所でも停電時でも診療できる体制を構築するべきである。

### 日野原重明賞特別賞　受賞にあたり

この度はとても素晴らしい賞を頂き、驚いています。昨年の第10回大会に参加したとき、日野原先生は「震災時の医療秘書の活躍についての発表がないことを大変遺憾だ」とお話されました。会場にいた私はとても恥ずかしい気持ちになり、次回（第11回）は震災の経験について発表しようと決めました。今回の発表に際しご指導頂いた田村院長、そして、発表準備の時間をくれたスタッフ全員にこの場をかりて感謝申しあげます。ありがとうございました。この賞はクリニック全員で頂いた賞だと思っています。

日野原重明先生から表彰状を頂きました

この経験は自分の自信となり、これから医療従事者としてさらに頑張っていきたいと決心させるものになりました。日野原先生の手はとても大きくて、暖かかったです。そのような手を持つ人になれるよう、これからも頑張っていきます。最後に、日野原先生に紹介された言葉です。

*病む人の喜びを私の喜びにしましょう*
*病む人の悲しみを私の悲しみにしましょう*
*病む人から与えられる鍵で私たちの心の扉を開こう*　　*～アンブロシャ・パレ～*

HILLTOP NEWS
坂の上野 田村太志クリニック

発　行
坂の上野 田村太志クリニック
北上市上野町4丁目2-15
TEL:0197-65-1111

号 外－1

2月23日(日)東京で開催された日本医療秘書学会で当院高橋留美の発表が学会長・聖路加国際メディカルセンター理事長の日野原重明先生(102)より日野原重明賞特別賞を受賞しました。院内報ヒルトップニュース35号に関連記事を掲載しました。また、3月1日発行の岩手日報及び岩手日日新聞の朝刊に大きく掲載されましたので号外として発行することにしました。両紙のWEB版にも掲載されました。

平成26年(2014)3月1日　(土曜日)　(日刊)

岩手日日

きたかみ

岩手日日新聞社
一関市南新町60
北上支社
北上市芳町9の5
電　話　0197(65)3447
(65)0468
FAX　0197(65)1569

©岩手日日新聞社2014
http://www.iwanichi.co.jp/

# 医療秘書学会で特別賞

## 高橋留美さん（市内病院勤務）が輝く

## 震災直後の診療体験発表

医療秘書は、病院勤務医の事務的負担を軽減するために生まれた職種。窓口や診療報酬請求事務、書類の下書き、医療情報の収集、医師のスケジュール管理などのほか、診療情報（診療録・カルテ）を管理、保管して診療や研究に役立てる。

医療秘書学会はその仕事を周知し、現場での地位向上を目指そうと毎年開かれている。高橋さんは前回参加した際、震災被災県からの出場がなかったことから今回の出場を決めた。

東北地方から唯一出場した高橋さんは「震災直後停電下での電子カルテを用いた診療経験」と題して発表。全てのカルテを電子化している同クリニックで、車などを使ってパソコンの電源を確保し、ポケットハードディスク、モバイルプリンターなどを使って通常通り診察を行った様子を7分の制限時間内で発表した。

「通常業務と並行しながら、パワーポイントなどの資料を用意するのは大変だった」と振り返る高橋さん。医療秘書の仕事は「患者と医師との間の潤滑油。現場の一番下に扱われることが多い職種だが、患者のためなくてはならない仕事だということを自覚し、その役割を周知していきたい」と話している。

北上市上野町の坂の上野田村太志クリニック（田村太志院長）に勤務する高橋留美さん（42）は、2月23日に東京都で開かれた第11回医療秘書学会で特別賞を受賞した。東日本大震災発生直後の停電時に電子カルテを使って行った診療経験を基に発表。「被災県の経験を全国に伝えることができた。受賞できたことが自信になったので、これからも頑張っていきたい」と話し、医療現場の事務作業を担う医療秘書の仕事に意欲を新たにしている。

医療秘書は、病院勤務医の事務的負担を軽減するために生まれた職種。窓口や診療報酬請求事務、書類の下書き、医療情報の収集、医師のスケ……

電子カルテに関する取り組みで第11回医療秘書学会特別賞を受賞した高橋さん

裏面に続く

HILLTOP NEWS
坂の上野　田村太志クリニック

発　行
坂の上野　田村太志クリニック
北上市上野町4丁目2-15
TEL:0197-65-1111

号外－2

2014年（平成26年）3月1日（土曜日）　第27559号　（日刊）

岩手日報

発行所
株式会社 岩手日報社
盛岡市内丸3番7号
郵便番号　020-8522
電話代表019(653)4111
振替口座02360-6-20番
©岩手日報社2014

# 高橋さん（北上）県人初受賞

## 医療秘書学会 日野原特別賞

## 震災停電想定し備え

## 翌朝の診察再開助ける

北上市上野町4丁目、坂の上野田村太志クリニック（田村太志院長）の医療秘書高橋留美さん(42)は、日本医療秘書学会の日野原重明賞特別賞を県内で初受賞した。3年前の東日本大震災の停電時、電池内蔵のノートパソコンで電子カルテを起動。かかりつけ患者の診療を続けて基幹病院への集中を防ぎ、本県の災害医療を守る一翼を担った。

「医療秘書として、災害医療を守る一助となれたことがうれしい」と話る高橋留美さん

表彰式は東京都港区の日本消防会館で2月23日に行われ、優秀賞4人と特別賞の高橋さんを表彰。聖路加国際メディカルセンター理事長の日野原医師(101)から賞状を受け、固い握手を交わした。

同診療所は震災による停電で患者の全診療情報を管理する電子カルテがダウン。震災当日、高橋さんらは手書きの処方箋を発行して患者を帰した後、再起動に取りかかった。

蓄電池を内蔵しているノートパソコンと小型プリンターを自動車で充電し、サーバーの代わりにノートパソコンの電源で動く小型ハードディスク駆動装置（HDD）を使ってシステムを復旧。震災翌朝から診察を再開した。

停電を想定し蓄電池で動く機器を用意していたほか、小型HDDにデータのバックアップを取っておくなど、普段の備えが生きた。

同診療所の患者には、糖尿病や心臓疾患など薬が切れると命に関わる人も多い。診療を継続できなければ患者が基幹病院に集中し、重症者の命を守る本来の機能が果たせなくなる恐れもあった。

後に同診療所はカセットこんろのガスを使う小型発電機や太陽光発電機なども導入し、約1カ月後の最大余震による停電の際に威力を発揮した。

高橋さんは「多くの診療所が災害時も診療を継続できるよう、私たちの経験を教訓に社会的な取り組みが進んでほしい」と願う。

(写真は岩手日報WEB版よりカラー版を転載)

関連記事は院内報ヒルトップニュース35号第2面をご覧下さい。